



4年 川島 達也くん



『えさをあたえる親鳥』

※葉・鳥・木などを本物らしく見せるために、材料をくふうしました。



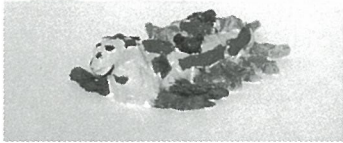
1年 大和田 鈴さん



『あじさい』

※あかとあおのえのぐをませて、あじさいのいろをつくってたのしくぬれました。

あつまれ みんなの 力作



『にんドクス』

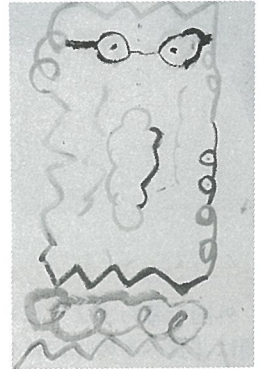


5年 土屋 英雅くん

※海の中に入るきょうりゅうついで、足がいつぱいあるのは、すばやく泳ぐためです。



2年 小川 郁美さん



『か お』

※まるい線とこがった線の組み合わせを考えた時が、たいへんでした。



6年 菱木 沙耶佳さん



『ひまわり』

※空と海の様子があまく表せました。花びらのバランスがとれてもむずかしかったです。



3年 平山 久実さん

※私は、中心をいしきしながらのびのびと書きました。むずかしい字でした。

ゆめ

小三 平山久実



ひかり俳壇

甲冑の眼 鋭き梅雨の冷え 椎名 静子 (二又)

甲冑そのものではなく、兜を据えた人面に焦点を絞ったことで季語に血脈を与えた

夏座敷 菩薩のごとき児の熟寝 越川せつ子 (篠本)

天真爛漫な幼児の寝顔に、愛おしさと言葉の慈顔を見た思いで、心安らぐ一時に浸る

溪流の音 さらさらと青葉闇 伊藤 定男 (尾垂)

静寂な深緑りの樹間を縫って溪流が走る。昭和十年代の幽翠な等々力溪谷美が蘇った

愚痴を呑み余 生明るく凌霄花 山崎 てい (二又)

風鈴や南部鉄器の音 冴えて 鴨川 篤 (尾垂)

梅雨冷えや医師の腕組まだ解けず 川島 重一 (尾垂)

シグナルに促がされ行く梅雨の傘 伊藤 幸枝 (尾垂)

梅雨冷や夕餉は早し 熱い汁 鈴木とし子 (宝米)

水銀灯 寿命絶え行く梅雨夜寒 評者吟 水銀灯 寿命絶え行く梅雨夜寒

短評 椎名しげる